



ふり乱れる長い髪 悩ましくよじれる肢体

美
み

髪
かみ

魅
み

鏡
かがみ

敗北の除霊師が鏡の中で
髪もカラダも恥辱に濡れる38p

見た目は本当に
普通の鏡ですわね
あまり古くもない
ですし……

そうねおキヌちゃん
悪い気もほとんど
感じないし……これなら
憑いてる霊もきつと
大した事ないわね

あらあ 安いギャラで
大荷物抱えてこんな
山奥くんだりまで来て
損しちゃったわ

ほら横島くん
さつさと除霊道具
一式出さない

はた
ただいい
美神さん！

大荷物全部担いで山道登って
来たのはワシやろがい！
乳もケツも態度もエベレストの
ようにお高くとまりおつてこの
女……！

夜になると
すすり泣くような声が
聞こえるブキミな鏡

そしてごく稀に
ではあるが失踪する
宿泊客……

霊の仕業かもしれない
それらの怪現象を
解決するために

美神令子除霊事務所
一行は山奥にある
旅館を訪れたので
あった……



美神さん!!

一見大したことのない
依頼と思われた

が

えっ?

横馬さん!!
美神さん!!
お久しぶりです!!
えっ...
えっ...
えっ...

悪いんだけど
おキヌちゃん？

冥子か唐巢先生……
何言われるかわかりや
しないけどもうこの際
エミでもいいわ

出来るだけ早く
呼んできてくれる？

引き摺り込まれる時
横島クンが投げてくれて
持ち込めた武器でちよつと
しのいでおくから

じゃ
よろしくね！

美神さん!?

そんな……
美神さん!!

美神さん!!

しかし
不思議なことに
横島が目を
さました時……

おキヌが再び宿に
戻ってきた時には
鏡はもう……

まるで
鏡に脚が生えて
走り去ったとでも
いうのだろうか

この旅館から
忽然と消えて
しまっていたの
であつた



神通棍もお札も
奥の手のネックレス
もダメか…

こいつ…
強いわね

すっかり
騙されたわ

今は安物の鏡に
乗り移ってるけど

あんた 元は
結構なお値段する
鏡の中にいたん
じゃない？

古代中国
とかのさ

ねえ？
鏡魔

こんな日本の田舎で
せこせこ神隠しして
何やってんのよ

一体何が
目的な
わけ？

カッ…

カッ…

カッ…

出るわ!!

死後の幽霊が…
サイテーのクソ妖怪が
生きてる人間に迷惑
かけてんじやないわよ

やられちゃう
わよね…コレ

……まあ女…
カラダ目当てよね
まいったなあ!!

私の美貌は
こんな奴のために
磨いたわけじゃ
ないっつてのに…!!

横島くん
おキヌちゃん
頼むわよ……

あの手この手
使つて出来る限り
抵抗したり引き延ばし
たりしてみようから……

魂の一片も
残らない程
ギッタギタに
痛めつけられる
でしょうね
もし私に手出し
たら…もうすぐ
来る仲間たちが
黙ってないわよ

チンタラやってる暇が
あるのかしら？逃げる
なら今の内じやない？

一刻も
早く戻って
来て…!!

ド
ン
ク
イ
ッ

『その古ぼけた姿見を
夜中に見てはいけない』

『あなたが美しい女なら
たちまち鏡の中に引きずり込まれ
二度と戻ってこれないだろう』

そう伝えられた
鏡があった

今は違う

『あなたが男なら
夜中にその鏡を
覗いてみるといい』

『そこには――』

『髪が長く美しい

裸の女が
映るだろう——』

故にこの鏡は
こう呼ばれる

みかみのみかがみ
美髪魅鏡
と



暗闇に浮かぶ女は
暗闇から延びる真っ黒な
手で……

真っ白な乳房を……
その先端に火のように
灯る真っ赤な乳首を

撫でるように
捏ねるように
弄りまわされ

闇の中で輝く
その真っ白なカラダを
くねらせ……その色
徐々に紅潮させていく

みるみる硬くなっていく
乳首とは逆に硬く結んだ
唇はみるみる緩み

快樂の吐息を
漏らしていく



顔こそ見えないが
まるで我が物顔の
ような無遠慮で
触り慣れた手つきで

その豊満な胸
ハリと弾力がある
大きな胸を男の
手が揉み搾っていく

女のカラダには
汗が滲み 噴き出し
一層いやらしく輝く

女の悦びを
搾り出されて
ぱくぱくと悦びを
零す下の唇

快楽に悶え
慌ただしく
振れ跳ねる
そのカラダは

手で顔を隠し唇を
きつく結び直そうとも
あまりに雄弁だった

まみまみ

まみ

きんきん

ちんぽ

ふん

ふん

ふん

うり

きん

うり

まみ

きん

きん

きん

鏡の中の暗闇に
尻が浮かんでいる

白く大きく
しっとり濡れた
いやらしい女の尻が

こんな美しい極上の女の
極上の秘所が 太く醜い
舌に舐めほじくり回され
悶える様を

鏡のこちら側にいる者に
特等席のドアップで
見せてつけてやると
言わんばかりに

男は女を
鏡の前に立たせ
片足を上げさせ
潜り込むように
舌を這わせる

さながらストリップショーやとか
ポールダンスのように 美しい女の
くねるカラダを見世物にしてい



これ以上の
体位はないと
思った

人外めいた触手の
ような長い長い舌で
ほじくられ：

男の赤黒い舌は
女の白く濁った
愛液でみるみる
白く染められ……

鏡は噴き出す女の
潮流れる愛液を
その鏡面に受け止め
てらてらと輝いていく

言い訳できない程
いろいろな雄弁に
濡れてしまつて
いるのだ

女はその事実から
目をそむける
事はできない

女は羞恥に
打ち震え悶え
鏡と舌を一層あやしく
濡れ輝かせていった……

ついに女の顔が見えた

プライドが高そうな…
そして少しバブリーな
雰囲気だが時代を
問わぬ美しさがある…

熟れた大人な女性の
ようで まだうら若き
少女のようにも
見えるのは

彼女がまるで
親に放尿を促される
幼い子供のように
抱えられ 股を
開かされているからか

そんな姿をとらされ
不機嫌を全開にした
表情をしていたからか

それとも彼女の
アソコが処女のように
ぴっちり閉じて
いたからか

彼女は随分長い間
鏡の中に囚われていて
聞かぬ外と内とは
時間の流れが違ったり
するのだろうか？

などとそんなことを考える余裕もなく
その時の僕は眼前に掲げられた絶世の美女の
アンバランスで瑞々しい女性器に夢中だった

キーン

ガ

ぱん

そんな僕らの
女性器に夢中な
様子を感じ取ってか

男は指で女の
媚肉を割って
全容を晒した

『見ろこれが俺が
舌だけでここまで
とろかしたおまんこ
だぞ』と言わんばかりに

く
も
う
く
も
う

開かれた杯からは
舌だけでこうなつたとは
到底信じがたいほどの
愛液が溢れた

ほ
ろ
ろ
ハ
ッ
ッ
ッ

か
は
お
まん
こ

女は悔しそうに
顔を歪めるが抵抗
するそぶりはない

先程まで
たつぷりとじつくりと
おまんこを舐めしゃぶられ
ほじくり回されたおかげで
もう既に腰砕けなのだ

まだ何もはじまつて
いないのにすべては
これからなのに

おまんこのほうは
じゅくじゅくに熱れ濡れ
粘り見ている僕ら同様に
『これから』を期待して
しまっているというのに



立ち上がった男は
まるでエスコートでも
するようにうやうやしく
女に手を貸した

しかし男の手が取ったのは
女の手ではなく足であり
女はドレスなど着ておらず
素っ裸であるため

女の脚は高々と
掲げられ濡れそぼった
女性器が再び露わとなる

そして僕は
目を見開く

女性器だけではない
ずっと女のカラダの陰に
隠れていた男の男性器も
露わになったからだ

あまりにも
太い 大きい
黒い グロイ

自分たちの
それと比べる
までもない

化け物じみたそれを
生娘じみたこの女の
ぴっちり閉じた
おまんこは

はたして
飲み込めるのか

そんな心配をする
僕らを尻目に……



女は男のチンポを
ぬるりと飲み込んだ

僕らに驚く暇も
与えず激しい
ピストンが始まる

グロテスクな
巨根を懸命に口
いっばいに頬張った
おまんこからは

愛液がじゅわっと
溢れる 上の口からも
悲鳴のような声が漏れる

てらてらと妖しく輝く
赤黒い巨根の先が
みるみる白く染まって
いく様子はつきり見える

掻き出された愛液や
噴き出す潮が鏡を打つ
様もよく見える

感じているんだ
イキまくっているんだ
おまんこも頭も真っ白に
なっているんだ

そして 鏡の向こうの
僕らにそう思われている
こともわかってるんだ

女は結合部を
僕らに見られている
羞恥で一層昂り……
時折『見ないで』という
言葉を漏らしながら

見るからに性豪そうな
男が一向に満足しないまま
腰を打ち続けられ続け……
何度も何度もイキ続け……



ついに男の射精の
時が訪れた

その体を鏡の向こうの
僕たちに大きく開いて
感じる様を魅せていた
女は

長い竿で胎の
奥深く深くに
精液を注がれ

カラダを一層大きく
開きのけぞるように
イキ果てた

女のイキ潮はまるで
車の窓を掃除する
ウオツシャー液の
ように

僕らの眼前の鏡に
勢いよく吹きつけ
られた



何十分だか前に見たのと同じようで、少し違ふ間、違い探しのような光景が僕らの眼前に広がった。

美白が印象的だった女は
顔も肩も胸もアソコも
上気して真っ赤に染まり

逆に赤黒い印象だった男の竿は白濁の泡を纏って白んでいた

鏡の向こうから
熱……むせ返るような
アツさと二オイが
伝わってくるよう
だった

僕は当時
セックスをした事は
なかったが

こんな極上の雌の
汁だく孕み頃ボデイからは
濃くて甘い、いいニオイが
する、といいなあ、などと
思っていた

休む間もなく二度目の
交尾がはじまった

悔しそうに苦しそうに
呻く顔が鏡に押し付け
られてよく見えた

童貞だった我々でも
ハツキリとわかった
さつきまでの一回戦は
鏡の外のギャラリーに
魅せるためのセックス
魅せるための体位

男にとってはここからが本番、ここからが獣欲を女にぶつける本気交尾なのだ——

まださる...
うか減...

おにぎり

はっ

おニやう

オ
ト
カ

は
ん
？

10

HO



おにぎり

はっ

本当に顔と
乳がよく見えた

激しく奥を
小突きまわされ
子宮を押し込まれ
押し付けられ

彼女の綺麗な顔と
豊満な乳は、衝撃と快楽に
歪んで様々な表情を見せた

突かれるたびに変わる
喘ぎ声の音色と、波紋の
ように絶えず形を変え続ける
両の乳房が奏でる美しさに

あの日の僕は
目と耳を
奪われた



永遠に続くかに
思われた肉と汁が
奏でる芸術は

最後はまるで万雷の拍手のような
雨だれのように鏡を撃つイキ潮の
音とともに終わりを迎えた

男の精液が一度目より
さらに深く深く捻じ込む
ように注ぎ込まれ……

女は一度目に
射精を浴びた時より
更に深く深く
イキ果てた



鏡の向こうからは
ニオイは伝わって
こなかったが

恥ずかしながら
あの日の僕は
きつと濃くて甘い
いいニオイ……

そして舐めれば
濃くて甘い味が
すると信じて
疑わなかった

眼前に広がる……
再び辱められて
大股を開かされた
彼女の女性器は……

散々擦り倒されて
真っ赤に染まりつつ
精液をなみなみ注がれ
白濁ともしており

苺に牛乳と練乳を
かけてぐちゃぐちゃに
潰したデザート
のような

とても
美味しそうな
色をしていて……

思わず鏡に舌を
伸ばし……僕は
もう少しで鏡の表面を
舐めるところだった

ねえあんたたち
少しでも
恥じる心って
もんがあんのなら

人を呼んで
来なさい

もう……
満足した
でしょ……

あんた
鏡魔も……
見てるアンタ
たちもよ……

こっちはもう……
いっぱいこれ以上
入りやしないって
のよ……っ♡

恥ずかしく……ないの
何が楽しいのよ……
女の子をこんな目に
あわせて……っ

それを
血走った目で
鑑賞なんか……
しちゃってき



何か言いかけた
彼女の口を
封じるように

男は女を勢いよく
持ち上げてそのまま彼女を
勢いよく串刺しにした

女は困惑と驚きと強烈な快楽が入り混じった悲鳴を上げ

鏡に顔を近づけていた
僕の眼前にはハメ汁が
散弾のように勢いよく
舞い散る

女の豊満な乳肉と
尻肉はこれまで以上に
激しく上下に波打ち

女の恥肉はこれまで以上に
左右に盛大に広げられ
ひしやげる様がハッキリ
見えた

波打つ大きな胸　大きな尻
長い足　大槍を飲み込むおまんこ
彼女の『大人のオンナ』を余さず
展示していたこの体位に対し

より一層巨根に深く
激しく突かれ余裕のない
彼女の乱れに乱れた
剥き出しの表情は

とても少女的で
そのコントラストを
一層際立たせた

子供のよう
に抱えあげられ
子供のよう
に泣かされ
結合部を剥
き出しにされ

このプライドの高
高そうな女は
一層羞恥に悶えた
ことだらう

子供のよう
に喚き散ら
しながら
体液を撒
き散らして
イキ散ら
かしていた

そして――

も
イ
イ
イ
も
折
な
に
な
何
イ
の
ま

そ

より一層 巨根に深く
激しく突かれ余裕のない
彼女の 乱れに乱れた

子供のように抱え
子供のように泣か

深く深く注がれ
深く深くイキ果てた
女は

男の手から
投げ出され
その
長い手足を投げ出し

鏡にもたれ
倒立するように
ひっくり返っていた

大股開いた長い脚を
ぴくぴく震わせるその様は
まるでカエルのように……
精液を噴き出す様は
噴水のように……

なにより
昭和のコント……
ギャグ漫画のようで

あの高飛車そうな美女が
こんな無様を晒していると
思うと

笑いだけでなく
興奮がたまらなく
こみ上げてきた

びびびび

ぽろぽろ……

びびび



女はもう子供のようになりしがみつき泣きじやくり許しを乞うしかない

この女に最初に感じた妖艶で大人びた豹のような……気品も気位も高く強そうな印象はもう完全になかった

5/5/5

もうイヤっ
いい加減に
してええっ
♡

あ

許してっ♡
許してっ♡
許してっ♡
もう堪忍してえっ♡

あ、あ、

孝

あ

もうムリなのっ
ムリムリ言つてたけど
もうホントのホントに
ムリなんだってばッ♡
限界なのよおっ♡♡

はあ

いい加減飽きなさいよ♡
 なんて飽きないのよ♡
 私より美人な女♡
 早く鏡の前に来なさい
 代わつてよもう♡♡

お願い来てえっ♡
じやないとイツく…♡
またイクっ♡ずつと
イカされちやつあつあつ

ただの弱いオンナ……
長い脚をふるふる
震わせてまるで鹿……

弱者が強者に食われて
いる……捕食のような
交尾……凶暴な雄の
獣に食い散らかされる
雌の草食動物……

そんな印象すら
抱かせた

たっ

長い髪を振り回し
鏡に押し付けられた
なやまし気なボディを
うねらせ

女は叫ぶような
喘ぎ声と共に ついに
誰かの名を呼んで
助けを求めている

この鏡に囚われて
彼女はどのくらい
経つのか？

名を呼ばれた相手との
関係は？大切な人なのか？
どれ程の間会えていない
のか？

という考えは
一瞬浮かんだが

たっ

はっ

おっ

横身

おっ

もっ

横身

はっ

ま

ギョ

眼前の美女が
魅せる巨尻による
ケツワイパー……
ドスケベ交尾尻の
迫力の前では

一瞬で
頭の隅に
追いやられた

ばんばん

鏡の中の怪人は
別の男の名を呼ぶのは
許さんと嫉妬に燃えでも
したのか

または女を奪い
寝取っているこの状況に
愉悦を感じ一層竿を
硬くしたのか

さらに一層腰使いを
激しくしていく

女はまるで
肉棒というピンで
はりつけにされた
標本のようなだった

ズリ落ちながらイキまくりつつ
鏡面に撒き散らかした性汁を
女のふり乱したその長い髪が
拭き取っていく

淫らな汁を纏って
その美しい髪艶と
鏡の光沢をさらに磨き
妖しく輝かせていく

『美髪魅鏡』
とはよく名付けた
ものだと思つた



鏡が割れるのではないかと
思うほど男の腰使いは
激しくなる

しかし鏡は決して
割れない 鏡は女を
こちら側に逃がさない

どれだけ泣き叫んでも
イキ果てても 無様晒しても
気を失っても

この化け物と
化け物チンポが満足
するまで終わらない

永遠に鏡の中に囚われ
永遠に腰を打ち付けられ
永遠にイカされ続け
永遠に注がれ続ける

永遠の 永遠の
永遠の 永遠の



永遠の絶頂







見入っていた僕は
時を忘れたという
やつだったのか

それとも魅入られて
いた我々は実際違う
時間軸にでもいたの
だろうか

あの夜は永遠のように
感じる時間だった……
射精しても射精しても
衰えることなく無限に
腰を振り続ける男

もう何度目か
わからない 自慢の
所有物を 自分の
マーキングを見せつける
行為……

女の膣奥から噴き出し続ける
精液も一切尽きることのない
悠久に続く滝のように思われた……



しかし永遠に続くかと思われた時間も終わりがくる

少なくとも鏡のこちら側では

夜は明けて
いずれ朝が来る

夜明けの気配を感じたのか
ようやく一旦満足したのか

男は女を抱え
鏡の奥・闇の中へ
消えていった

女の美しい脚と髪
そしてはしたなく
垂れた精液が
手を振るように
揺れる

鏡の向こうには
朝は来ない 鏡の中は
永遠に終わりは来ない

彼女はこれからも
抱かれ続け……
鏡にその痴態を
映され続けるのだ

夜が来るたび
永遠に……



それが昔
平成の夜僕が
友人の屋敷で見た…

泊まりに行った際
彼が夜中に内緒で
こっそり見せて
くれた

最初で最後の
夢のような
光景だった

いくら絶世の美女
とはいえ十年二十年も
見続ければ飽きると
いうやつだろうか

な言っただ通り
だったろ！

彼の父が保有して
密かに愉しんでいた鏡は
その後手放され

また別の金持ちの
手に渡ったようだ

うん…うん
すごかった！

早く部屋に戻らないと
もうすぐ朝だメイド
たちに見つかっちゃう

あの日強烈に脳に
焼き付いた光景…
美しいあの女の
いやらしい姿を
もう一度見たいと

家を継ぎ財を得た私が
手と力尽くし足取りを追って
今なお叶っていないのだから
『ヨコシマクン』……

きっとあの女が
口にした名前の者
たちも 鏡と……

彼女との再開は
叶っていないの
だろう



あゝ

あゝ

ちゝ

そもそも
まだ彼女を
探している人は
いるのだろうか

いるのならその人は
何歳くらいの年齢に
なっているだろうか

今や年号は
令和に変わって
久しい

きっと
鏡の中の彼女は
今も変わらぬ姿の
まま……

どこかの屋敷に
飾られて……
変わらぬきつと
今夜も……

あゝ
くら

くら
くら























































































